



神よ。あなたが、天であがめられ、あなたの栄光が、全世界であがめられますように。詩編57:11

雲の上、太陽は常に輝いている。



そして、私はなお立ち上がる。 マヤ・アンジェロウ

天界をかいま見る

最後の戒は、自分の身勝手な欲望を放棄することで、新しい生活への道、より高い次元の存在様態、通常の意識の上の領域に導きます。私達は、世の事物を所有しようという節度のない愛を放棄するよう求められ（国と・・・）、さらに、同じように節度のない自己愛やプライド、他人を支配しようとする試み、そして「パワー・トリップ」を、放棄するよう求められます（力と・・）。そこは、どのような見た目はどのようであろうとも、新しい意識のレベルであり、常に神がおられます。

世界の偉大な宗教で絶えず説かれているのは、現実には、人はすべての瞬間、まことに完全に導かれており、人が身勝手な欲望を捨てれば、神はたちまち愛と知恵と力をもって流れ入ってこられます。神は私達にすべてを与えようとなされ、あふれる喜びと幸福で満たそうとされています。それを遮るものは、知ったうえで、あるいは知らないで、自分たちが動かそうとしないだけのものです。一見来るように見えるチャンスは、私達が気づくかどうかは別として、全能の神のまなざしの下にあります。神のお許しでさえ、—それは神のご意志ではなく、神が私達に起こるのをお許しになるものであり—神の摂理の配慮と愛のまなざしの下にあります。「アッラーはすべての事物のことをすべてご存じであるから」（クルアーン29:62）

物質的世界の生活はときに厳しく、不公平で、手に負えない事もおこるものです。しかし神は、私達の霊的な現実には眼をお開きになり、そこは時と空間の内でありながら、それを超えて永遠に存在している永遠の世界です。心が開かれ、高い次元をかいま見れば、そこにはただ一人の神がおられ、無限の愛と知恵をお持ちになっていることを知ります。神は私達にはすべては理解できなくとも、あらゆる瞬間に私達の面倒をみておられます。そしてたった今でさえ、天のみ国の栄光の中と、私達が喜んで受けるすべての喜びの内に導かれています。

ライズ・アヴァブ・イット 乗り越え、克服せよ

ここに至れば、言葉はやみます。心に思い起こすのは、ペンシルヴァニア州ピッツバーグの冬の雨の日のことです。雨は何週間も降り続き、雲は暗く、鬱然としています。私達は飛行機に乗り、離陸速度に達するため滑走路を走る機内から飛行場を眺めていました。離陸の時が来ましたが、それは力強く、なめらかでした。数千ポンドもあるかと思われる巨大な鉄の鳥は、空中に舞い上がり、窓に押し寄せてくる厚い雲を貫いてゆきます。するとそこには、静謐のうちに、荘嚴な太陽が輝いています。水平線からはかなり離れているはずなのに、「古代水夫」のある文章が心に浮かびました：「我々は最初に打ち破った者／あの静寂の海を」（サミュエル テーラー コールリッジ「古代水夫の霧氷」）

まさにその瞬間、雲の上に太陽が輝いていることは、かくれもなく明らかです。雲の上で輝く太陽は、神の愛を完全に表しており、輝きは不変で、休むこともなく、善きも悪しきにも、正にも不正にも、今そして永遠に、全世界の上で輝いています。その瞬間、闇、そして悲哀の上には、より高次の、より荘嚴なレベルの意識、そしていつでもてにとることのできる意識が待っています—ただ戒めを保とうと努力するのであれば。

